

された役割および価値と同一化するよう条件づけられている時には、非常に有用なプロセスである。そのような同一化は、任意の文化にとつての正常さの（暗黙の）定義の一部である。旗と自動的に同一化し、旗を燃やす人々についての記事を読んで個人的に侮辱されたと感じる人々は、公認された文化を支持すると期待することができるとなっている。

同一化のプロセスはまた、個人的な観点からも有用に思われるかもしれない。一人の学生が私のところに歩み寄って私に質問すると、私の教授としてのアイデンティティが、私の側のいかなる意識的努力もなしに、直ちに誘導される。私は教授らしく振る舞い、その学生に答えるか、あるいはどこに行けば自分で答を見出せるかを教える。彼女は、教授は学生の質問に答えるものであるという、自分の秩序立った世界観を強固にされる。私は、自分が答えを知っており、また、答えを知りたがっている学生たちによって尊敬されている教授であるという、自分の秩序立った世界観を強固にされる。それは全て、なんの努力も要しないように思われる（実際には多大のエネルギーを要するのであるが）。事実、もし私がこの状況で教授としての自己になることを欲しなければ、自動的にそうすることを避けるためには、注意の意図的で意志的な制御——これについては、グルジェフ流自己想起として後で詳しく論じる——が必要になる。

同一化の一見した有用さのもう一つの例として、仮に私が、長くて退屈ではあるが、しかし成し遂げられなければならない仕事の最中だとしてしよう。私は、本当はそれをやめて、休憩するか遊ぶか、なにかもっと刺激的なことをしたいと思っっている。代りにすべきだと私が思っている、他のもつと面白いことについての考えが心に浮かび始める。自分の机の上がきれいにされるべきだ、かけなければならぬ電話があり、コンピューター・ディスクのバックアップコピーを何枚か取るべきだ。これらの

考えは（本当であろうとなかろうと）、必要だが退屈な仕事を続けるのを避けるための合理化として働く。強いて自分に仕事を続けさせることは大変な努力である。いや、待てよ！ 私は、自分が信頼できる、たのもししい人間であることをたつた今思い出したぞ！ 私は、信頼できる、たのもししい人間としてのアイデンティティ、自分が誇りにできるアイデンティティを持っているのだ。この仕事を終わらせれば、私は誇りを感じることによつて報われることだろう。信頼できる人間は自分自身のことを誇りに思つて当然なのだから。今や、私の（内面的な）報いへの期待が、私に仕事を続けさせるのを助けるのだ。

この例をさらに調べてみると、それが同一化していない状態から同一化した状態への移行というよりはむしろ、同一化の変更の問題だということがわかる。仕事というものは退屈でも刺激的でもなく、仕事は仕事である。人間は退屈したり興奮したりする。けれども、ある人にとっては刺激的な、あるいはどつちつかずの仕事であるものが、他の人にとっては退屈かもしれない。私が最初に感じた退屈は、ありうる多数の自己概念のうち、この仕事によつて退屈させられた自己概念と知らず知らずのうち同一化したことのをせざるわざだったのだろうか？

すると同一化は、有用な目的のために注意とエネルギーを自動的に（かつ効率的に？）動員するための有用なプロセスのように思われる。が、実際には、それは非常に高くつくプロセスである可能性がある。

同一化の代価

同一化には代価——心理的に言えば、われわれが好まないかもしれない結末——がある。

変わりゆく世界の中での静的なプロセス

同一化の一番目の主要な代価は、同一化が「静的な」特質を持つていくという事実から来る。われわれは、自分の心が暗黙のうちに永続的であるべきだと信じているもの（たとえば、身体、自動車、財産、過去の出来事）と同一化する。論理的に、意識的に、われわれはより良く知っているのだが、しかし自分が同一化してきたものについて、論理的かつ十分意識的に考えることは減多にない。われわれが同一化する心的概念でさえ、固い、「物的な」特質を帯びているのが普通である。一分前にあなたが言ったことが永久的なものになってしまふ。あなたの決心は永久に正しいとみなされる。世界についてのあなたの理解は絶対的な真実であるべきである。あなたは自分が永久に正しいと感じるべきである。

物質界あるいは自分自身の心の中の何かに同一化することに固有の困難は、現実に変化し続けるということである。現実は無常でしなやかな変化をこうむる、と多くの哲学者および霊的伝統は指摘してきた。したがって、あなたが何かと同一化する時、その何かは変化していき、あなたがそれと同一化した時には、元のままに留まってははいない。あなたは、自分が同一化した対象の現実がもはや同じではないので、結局は失望することになるであろう。「彼／彼女は、私が結婚した時のあの素晴らしい人

ではない。彼／彼女は変わってしまつたのだ！」という嘆きを、われわれはいかにしばしば耳にしてきたことか。あるいはあなたは、変化してしまつた同一化対象との同一化を放棄するよう、自分を強いるをえなくなるだろう。通常、同一化のプロセスは、たとえその不随意的な作用が絶えず多くの急激な変化を伴うとしても、意図的な変化を好まない。

「私！」である身体は病気にかかり、年を取り、やがては死ぬ。私の愛車は故障する。私の所有物はこわれ、ほろほろになり、盗まれるかもしれない。私は過去の出来事についての自分の記憶にすがりつこうとするかもしれないが、しかし記憶は薄れ、他の人々はその出来事が本当に起こつたかどうか疑うかもしれない。いずれにせよ、記憶は現実ほど満足のいくものではない。昨年私が得た、一見して素晴らしい洞察は消え始める。そもそも、それは果たして本当だったのであるか？ クラスの一人の学生が手を挙げる。「あなたの『意識の諸状態』という本の一五七頁で、あなたは……と書いていらつしやる」。私は、それが現時点で非常に適切な所説であると自分が思っているかどうか確かではないのだが、しかしそれを弁護しなければならなくなるのではないだろうか？ 物事と同一化することによって、われわれは結局は損をするために陥らされるのである。宇宙は敵意に満ちている、われわれは欠陥だらけで脆い、という共通の文化的信念から生ずる不安は、見たところ変化に対する盾としての同一化を、よりいっそう魅力的にする。

誰があなたの同一化を選んだのか？

同一化の二番目の主要な代価は、あなたが自動的に同一化する物事および役割のほとんどは、そも

そも、あなたが選んだものではなかったという事実から来る。文化適応のプロセス、合意的トランス誘導の一部として、あなたは、あなたの本質にとつてはほとんどあるいはなんの関心もなかったかもしれない、あるいは本質に反してすらいた多くの役割、観念、人々、主義主張、および価値と同一化するよう、うまく丸め込まれ、条件づけられたのである。事実、われわれが同一化した人々のうちの何人かは多くの不適応のおよび精神病理的性質を持ち、そしてそれらの人々と同一化することによって、われわれは彼らの欠点のいくつかを取り入れたのである。このことは特に、われわれの両親について言える。

人々は、一般に、晩年になってからこれらの不本意な同一化の側面を発見する。あまりにもしばしば、われわれは次のような話を耳にする。「私は自分を無理やり法科大学に合格させ、二十年間法律を生業としてきた後、ある日、自分が本当は法律に全然興味がないことに気づいたのです。私の両親は、常々、ただただ私が父の志を継ぐことを期待していました。私の中の何かがそれに伴うストレスを常に嫌っており、私は潰瘍や高血圧にかかりました。私は、人生の大半を自分が嫌いなことをすることに費やしてしまったのです！」

同一化が物事に注意とエネルギーを払うということを思い出していただきたい。われわれは無尽蔵の注意とエネルギーを利用できるわけではなく、したがって、もし同一化のいくつかの対象に注意とエネルギーを注げば、その他のものからそれらを取り去らなければならない。われわれが同一化するよう条件づけられた物事との同一化は、われわれの本質の好みにおかまひなく、人生の主要な側面となっており、それをわれわれは自分の人格と呼んでいる。われわれが選んだものではないか、多くのもものと自動的に同一化するという事実は、グルジェフが人格を「偽りの人格」と呼ん

だ理由の一つである。

同一化の自動化

同一化の三番目の主要な代価は、そのプロセスがあまりにも自動化しているということである。よく発達したあなたのさまざまなアイデンティティがもし洋服だんすのようなものなら、任意の場合にどの衣裳、どのアイデンティティがもつともふさわしいか、もしあなたが意識的に選ぶのなら、あなたが全てを知っていると仮定すれば、アイデンティティは有用な道具と言えるであろう。けれども、普通起こることは、状況Kが常に自動的にアイデンティティKを呼び出す、ということである。

もし状況が実際にはアイデンティティKの手に負えないほど複雑なら、アイデンティティK（さしあたりは「あなた」）は、たに演ずるかもしれない。あなたの残りのアイデンティティの全て、および、なんであれそれらの奥にいる真のあなたは、アイデンティティKがその状況でしたことの結果を受け継ぐことになる。グルジェフはそのことを、あなたの多数のアイデンティティのどれか一つが小切手や請求伝票にサインすることができる、という事実として表現した。残りのあなたの全ては、あなた／彼らがそれを好むと好まざるとにかかわらず、支払い義務を負う。「いったいなぜ私はこれこれのことにするなどという約束をしたのだろうか？」と、われわれはいかにしばしば自問してきたことであろう？ こう自問している人は、約束した者ではないかもしれないのだ。

同一化の最後の代価は、条件づけられたアイデンティティが容易に、自動的に利用できるため、これらの表面的な現れの奥にあるあなたの真のアイデンティティ、あなたの本質、あなたのより深い自

己をあなたが知らないという事実をあなたから隠すことができるという事実から生じる。あなたは、本当にあなたの名前だろうか？ あなたの役割だろうか？ あなたの感情だろうか？ あなたの知性だろうか？ あなたの身体だろうか？

あなたは、あなたが同一化してるとんなものよりもはるかに大きな存在なのである。

次章では、習慣的な同一化の結果——アイデンティティ状態——を検証することにしよう。

【原注】

(1) タート「意識の諸状態」p.130.

第十二章 アイデンティティ状態

意識の統一性は錯覚である。人間は一度に——常に——一つ以上のことをするので、それらの行動の意識的表象は決して完全ではない……能動的主体として、彼は常に意思決定し、計画を立て、実行しており、そして自分がしていることを統御していると信じることを好む。しかしながら、しばしば、彼は自分の行動の原因について思い違いするかもしれない……意識の統一性は、幾分かは、認知と想起によって記憶の空隙を埋めることの結果として起こる錯覚なのである。

より広い文脈においては、意志行為の問題は人格の統一性についての疑問を持ち出す。意志の強さは、長時間もちこたえ、個人の性格的特性になんらかの統一性を付与する、浸透した特質なのだろうか、それともそれは、現下の状況の制約によって影響され、断片化される何かなのだろうか？ 一般的な答えを与えることはできる——人格は、われわれが信じたいと思っているよりずっと統一されておらず、意志は、知覚プロセスとちょうど同じように、解離（分離）しやすい。

これらの引用のどちらが主流派の指導的心理学者からのもので、どちらが霊的な師からのものだとあなたは思われるだろうか？

前章でわれわれは、同一化のプロセスがいかに浸透しているか、「これは私だ！」的特質がいかに

してほばあらゆるものに付加されうるのかを検証してみた。われわれは数多くのものと同一化するこ
とができるが、習慣的な、自動化した同一化のパターン、識別しうる「アイデンティティ状態」を形
成する、幾組かの関連した同一化対象がある。本章では、これらのアイデンティティ状態、すなわち
副自己] *subselves* を検証することしよう。

われわれの複数の自己

われわれは自分自身のことを一つだと思いついでいる。チャールズ・タートという私の名前は、一
個の統一された有機体を表わしている——おそらくは。同一化のプロセスのせいで、われわれは自分
の意識を通過するほばあらゆるものに対して自動的に「私！」と言ってしまう。けれどもわれわれ
は、自分自身の内部に一瞬だがかなり根本的な変化を認め、そのため自分自身のことを「自分は自分
ではなかった」と、あたかも自分が他の誰かであったかのように述べる時がある。われわれは、よ
く、「ごめんなさい、自分が自分ではなかったんです！」という言い方をする。

変性状態におけるアイデンティティの変化

精神医学には、病理的なものは、それが正常なものとの誇張的表現であるが故に、正常なものをよく
見えるようにしてくれる、という古い格言がある。病理は目立つのでよく見えるのだ。われわれが変
性意識状態として集合的に言及しているような種類の根本的な変性は、われわれのアイデンティティ・

パターンにおけるいくつかの変化の明白な事例である。たとえば、人がアルコールや何かその他の心を変性させる薬物で強く酩酊している時や、あるいはわれわれが夢を見ている時である。時々われわれはまた、大きなストレス状態の下で、「私！」感覚、まさに自分は誰かという感覚が根本的に変わってしまいうることを見ることもできる。こうした意識の根本的な変性は、さもなくば通常の背景の中に混ざり込み、もちろんのこととして気づかれることがないであろう、同一化のプロセスと対象の変化が見えるようにさせる。しかしながら、これらの著しい変化はわれわれの通常の、統合的な意識とは性質が異なる異常なものであるという考えは、大きな錯覚を永らえさせることになる。

アイデンティティの源としての身体

われわれは各々、来る日も来る日も同じ身体を持ち続けるという意味で、確かに根元的統一性を持っている。われわれには非常に多数の事実的記憶がほほいつでも確実に利用できるという意味で、われわれは統一性を持っている。これらの記憶は全て単一の身体についての感覚的知覚に関して組織されるので、それらが単一の自己に属していると結論づけることは容易である。また、人々はわれわれのことを（あるいは、より厳密には、われわれの身体のことを）いつでも同じ名前と呼び、また、われわれがどう振る舞うかについての固定した期待を抱いている。

けれども、これはあまり意識の統一性に賛成の議論をするための根拠にはならない。あなたの生活についてのこれら全ての事実は、おそらく、一台のコンピュータに保存されることができ、それから、それら全てを単一の「身体」の中で確実に利用できるようにするであろう。そのコンピュータ

はいつでも同じ名前前で呼ばれ、そして人々はそのコンピュータが何をするかについての固定した期待を抱くことであろう。われわれの第七世代選別クレীনはこのレベルまで進化していた。われわれは、意識、いわんや単一の意識をそのコンピュータに帰することを欲するだろうか？

統一性という錯覚

前章で、われわれは同一化のプロセスの浸透について述べた。どんなものにも「私！」的特質を付与することができる。これは大きな強さで、かつ、ほぼ一瞬のうちに起こりうる。グルジェフはそれを次のように言い表わした。

人間の大きな間違いの一つ……忘れてはならない間違いは、彼の〈私〉に関する錯覚である。彼の〈私〉は、思考、感情、気分と同じくらい素早く変化し、しかも彼は自分自身のことを常に全く同じ人間だと思いつつという大間違いを犯す。実際には彼は常に違う人間なのであり、一瞬前にそうだった人間ではないのだ。

人間は、永久不変の〈私〉など持っていない。あらゆる思考、あらゆる気分、あらゆる欲望、あらゆる感覚が「私」と言う。そして各々の場合に、この〈私〉が〈全体〉、全人に属していることはもちろんのことと思われているようだ……。

グルジェフが今世紀の初めの頃にこのような所説を述べた時、それらはわれわれが知っているあらゆることに矛盾しており、そして確かにそれは、われわれが自分自身について信じたいと思つていたことを侮蔑しているように思われた。本章の皮切りとなつた、われわれの統一性の欠如を強調した二つの引用のうちのどちらが霊的な師からのものか、と私は尋ねた。答えは、どちらでもない。両方とも、スタンフォード大学で心理学を講じているエルネスト・R・ヒルガルト名誉教授によつて述べられた所説なのだ。彼は米国の一流の心理学者の一人であり、高い敬意を払われている心理学主流派の指導者であり、「主流逸脱派」的見解の擁護者とはみなされていない。私は、彼の研究室で博士課程修了後の特別研究に携わるといふ幸運に恵まれた。

われわれの人格または自己における統一性またはその欠如を理解するためには、単一の身体と結びつけられた事実的記憶データ以上のものを吟味してみなければならぬ。好き嫌い、価値、感情的経験、希望や怖れ、意図、無意識のプロセス（健全および不健全な）、および多くのより微妙な心理的プロセスを含めなければならぬ。われわれが自分の心理的機能の全てを考慮に入れる時、正直な自己観察ならびに他の人々についての観察は、われわれが一ではなく多であることを示す。時間の中のある瞬間に撮られた包括的な心の「写真」は、他の瞬間に撮られたものとは全然異なる人物を示すかもしれない。事実、もしあなたが共通の身体とひとまとまりの事実的記憶、あなたに与えられた名前、およびあなたに対する他の人々の固定した期待を取り去つたら、これら二つの人格が共通の何かを持つていると信じていることが時々滑稽に思えることだろう。

これは、極端な場合について見てみればわかりやすい。たとえば、仮にあなたが極度に脅やかされたり怒つたりした時、あるいはとても安心して、愛情深かつた時、あるいは、面白いのだがきつ

い仕事にすっかり没頭していた時に、自分自身を観察したとしよう。あなたは違う人間のように見えることだろう。われわれの異なった自己の中このこうした根本的な相違は例外的なものではなく、きわめて浸透しているということをグルジェフは強調した。「私！」は、刻々に違った人間でありうるのだ。

ここで、第一章で意識の状態が定義されたのと同じ仕方、アイデンティティ状態を定義してみよう。

アイデンティティ状態とは、任意の個人（個人的な相違は非常に重要である）にとつて、複数の心理的構造ないしサブシステムの、ある独特な布置ないしシステムである。分析のために区別することができる精神（心）の諸部分ないし諸側面（記憶、価値、技能など）は、ある一定の種類のパターンないしシステム内に配列され、それに「私！」という感覚が付与される。そのパターンないしシステムがアイデンティティ状態である。そのパターンや、そのパターンの性質とそれを構成する諸要素が、その状態であることができることとできないことを決定する。たとえば、非常に有能で、自信に満ちたアイデンティティ状態においては、他のアイデンティティ状態では夢にも思わないであろうチャンスをつかむことができる。

アイデンティティ状態はダイナミックなプロセスである。パターン全体は見たところ同じままであっても、その諸側面は細部が絶えず変化しているのだ。たとえば、過ぎ去っていった私のいくつかの思考の特定の中身はそれぞれ異なるが、私の全ての思考は、明らかに、私が自分の書記と呼ぶ一つのパターンの部分として起こっているのである。私は時々、状態というものを、手品師が数個の玉をぐるぐる円を描いて投げているようなものだと思うことがある。玉は常に動いているのだが、それら

が形づくるパターンは円形のままなのだ。

あるアイデンティティ状態のパターンは、何か他のアイデンティティ状態にとっての重要な刺激となる、外的または内的ななんらかの一つまたはそれ以上の出来事が起こるまで、かなり安定している。感情は、アイデンティティ状態の変化を引き起こす一般的誘引である。普通、人格と呼ばれている、その中でわれわれが機能する諸々のアイデンティティ状態の通常の範囲のことを、グルージェフは「偽りの人格 false personality」(第十五章で論じる)と呼んだ。なぜなら、それらのアイデンティティ状態は、われわれの本質^{ナチュラリティ}または高次の意識が選んだものというよりはむしろ、文化適応の過程でわれわれに押し付けられたものだからである。通常の諸々のアイデンティティ状態の集合は、主として、われわれが日常的意識(合意的トランス)と呼ぶ包括的パターン内に存在している。

「私!」の持続時間

時として、ある特定の「私!」が数分間、あるいは数時間も持続するかもしれないが、しかしそれはわれわれにとつてなんら名譽ではない、とグルージェフは力説する。それは、その特定の「私!」を活性化する状況が持続することの機械的な結果なのである。序文の皮切りとなったエクササイズで、秒針に充分に意識を留めると決意した「私!」に何が起こっただろう? 外部からのなんの強化もない、ほんの数瞬でそれは他の「私!」——秒針を見つめている間じつと意識的であるという決意になんの関心もない、他の「私!」——によって取って代わられたのではないだろうか? 前章で論じた同一化のプロセスは、やって来るあらゆるアイデンティティ状態に対して「私!」とわれわれに言

わせるが、しかしそれはわれわれに、永続的な、自己決定するいかなる種類の私も与えはしない。合意的トランスにおけるさまざまな「私！」の出現は、普通の催眠における催眠後の暗示に全く類似している。暗示された／条件づけられた刺激が現われると、それと結びついた行動、条件づけられた感応、特定の「私！」が現われるのである。

アイデンティティ状態

これらのさまざまな「私！」のことを、意識の諸状態を研究する際に私が導入した「アイデンティティ状態」(identity state)という用語で呼ぶことにする。アイデンティティ状態とは、全体として認識しうる特質を持った心理的諸要因の一時的な布置で、あなた(もしあなたが後に論じられるような自己観察に習熟していたら)または外部の観察者たちが明瞭な実体として認識できるものことである。他人による認識は、「ジョンはまた酔っぱらっている」とか、「キヤロルはご機嫌斜めだ」とか、「ビリーは今日は自分で災難を招くようなことをしている」といった一般的な表現で表わされる。アイデンティティ状態は、いずれの意識状態とも同様に、解釈である。選択された特徴(記憶、同一化の対象、一定の気分への傾向、連合した空想、一定の技能、等々)が一時的に連結し、一個の認識しうる全体、はっきりした「趣き(特色)」を持った全体として機能する。このアイデンティティ状態は、それから、あなたが周囲の世界をどうシミュレートするかを、したがってあなたが自分自身および自分の世界をどう知覚するかを決定するのである。

あるアイデンティティ状態に陥っている人は、普通、自分がある特定の状態に陥っているということ、そ

の状態が自分自身の全体を表わしてはいないということ、を知らない。それが合意的トランスの怖さである。あなたの意識の全てがその状態と同一化しており、何が起こっているかについてあなたの覚醒を促す、その状態の外部のものが何もないのだ。既知の諸特徴の一定のアイデンティティ状態があなたの内部で活性化されつつあると、それが起こり始めた時にもしあなたが即座に知れば、あなたはずっと楽に生きられるだろう。そのアイデンティティ状態を促すか妨げるか、いずれかを選ぶことができるだろうから。もしあなたがすでにその中にいたら、その状態にいたいかどうかを決めることができるであろう。「状態Dがやって来たが、私は状況Xの中にいる。状態Dは、状況Xの中で私の目標を達成するのに役立つだろうか？」この、アイデンティティ状態を選ぶ能力は、第一章で論じた悟りの諸側面の一つ——あなたがいる状況にとってもっとも適した（変性または日常）意識の状態を選ぶ能力——のように一つの道具とみなされ、あなたは自分の課題にふさわしい道具を選ぶことだろう。

たとえば、その特定の状態が、あなたがいた境遇の中でいつもあなたを面倒な事態に陥らせたことを過去の経験からあなたが知ったら、あなたはその状態を非活性化させる仕方を覚えるかもしれない。あるいは、それと同一化せずに、あなたのより大きな目標や知識に照らして、わざと、その状態を用いることができるかもしれない。が、通常は、そのようなことを自覚しないまま、われわれは自分のアイデンティティ状態の事実上全てに対して自動的に「私」と言い、しばしば残りのアイデンティティと真の自己にとって手痛い結末を招くことになるのである。

アイデンティティ状態によって引き起こされる紛糾

複数の自己を持つことの結果としてのもっとも明白な困難が起こるのは、多重人格の場合である。多重人格者は、しばしば、彼らのその他の自己の経験と行動への完全な記憶喪失を示す。各々の自己は記憶の長いギャップを経験し、そして突然目覚めて、自分が全くの他人と一緒にという状況に巻き込まれていることに気づくかもしれない。病気や薬物に対する身体的反応が人格ごとに変わるかもしれない。クラブトリートの「多重人間 Multiple Man」(一九八五年)やキースの「ビリー・ミリガンの複数の心 The Minds of Billy Milligan」(一九八二年)は、多重人格者についての優れた報告である。しかしながらわれわれは、あなたや私のような普通の人間の、まだ認識されていない多重性と共に留まることにしよう。

われわれの多数のアイデンティティ状態によって引き起こされる紛糾のいくつかを検討するため、私のいくつかの人生経験に基づいて一つの例を創作してみよう。

その状況とは、客観的に言くと、次のようなものである。私の家の庭を横切るようにして一本の小川が流れている。その川にかかった小さな橋を修理しようと、私は川床をちよつとした作業をしていた。私は川床に小さな梯子を置き忘れ、そこに思いがけないほどの大雨が夜通し降って川床を洗ったので、その梯子が押し流されてしまった。私は自分の梯子を取り戻したいのだが、それは梯子を見つけるか、あるいはもはや取り返しがつかないほど失われたと観念するまで、他の人々の裏庭を通り抜けて、川下へとたどって行かなければならないことを意味する。

私は川床をどんなふう歩いて行ったらいいのだろうか？ 誰が川床を歩いていくのだろうか？

状態1…探険好き

私は、すぐに利用できる三つのアイデンティティ状態を持っている。状態1は私の幼少期にそのルーツを持っている。それを「探険好き」と呼ぶことができる。探険好きはあちこち歩きまわり、物を発見するのが好きである。私はほとんどあらゆることにいつも好奇心をそそられていたので、この特定のアイデンティティは私の本質の重要な側面を組み込んだものである。探険好きはまた、自分には外を歩きまわる権利があると信じており、邪魔をする扉やその他の障害物を立てた人々に憤りを抱く。

状態2…善き隣人

状態2は「善き隣人」と呼ばれ、人生の後のほうで発達したものである。このアイデンティティ状態にいる時、私は自分のことを地所所有者——自分のプライバシーや自分の地所の排他的な管理を尊重する所有者——とみなす。善き隣人はまた、自分の隣人たちと仲のよい関係を保つていことが好きな友好的な人間でもある。

状態3…不法侵入者

状態3は、探険好きと同様、私の幼少期にそのルーツを持っている。われわれはそれを「不法侵入

者」と呼ぶことにしよう。彼の世界は面白い場所であふれているのだが、あいにく、それらは力の強い、非友好的な成人たち——自分の地所に侵入する少年たちをどなりつけ、彼らを傷つけ、親たちともめ事に巻き込むことが好きな成人たち——のものなのである。不法侵入者の世界は、ルールの点でかなり絶対的である。

身体としての私は、梯子を捜しながら、川下へと歩いていく。面識がないある人の裏庭にいと、男の人が開いた窓から顔を出して、叫ぶ。「君はそこで何をしているんだい？」 われわれは、この男の人がいるかもしれないアイデンティティ状態、およびそれが彼の叫び方にどう影響しているかは、まだ考慮に入れないでおこう。彼の叫び声のことを、実際に起こっていることについてのただの単純な記述だとしておく。

私はその叫び声にどう反応するだろうか？ 私の最初の内面的反応がどういうものになるか、私がどう応え、そしてその後何が起きるかは、おおいに、男の人が私に向かって叫ぶ瞬間に私がどんなアイデンティティ状態にいるかの関数なのである。

仮に、その瞬間に探険好きが優勢だとしよう。私の知覚は、男の人が私に向かって叫んだという事実、明らかに敵対的な行為、を強調するだろう。私は彼の裏庭を通り抜けることによってなんの危害も加えていないので、彼が私に腹を立てるのは不当というものである。自分は不公正の犠牲者だという気持ちを含めながら、川床は公共の財産なのだから、私が川床にいることを男の人が問題にする権利はないということ想起するであろう。あたかも私は彼の地所の上にいるかのようではないのだ。

この「想起」は、実際の記憶というよりはむしろ作りごとかもしれないのだが、しかしそれは自分を